

日本常民文化研究所では研究所の創立者、澁澤敬三が同人を集めて『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻を作り、刊行した。1954年のことである。

発想の源泉は字引に習って「絵引は作れぬものか」というものだった。そこで敬三は研究所に民俗学・歴史学・民具学などの研究者を集め、日本中世の絵巻物などを対象に、描かれている図絵をアットランダムに切り取り、研究会を進めながら「凡そ常民的資料と覚しきものだけを集め」て事物や行為などに番号を付し、名称をつける作業を進めた。

澁澤の『絵引』作成の思いとは「民俗学の中でもマテリアルカルチャーの資料として、クロノロジーを明らかにし、文章のみでは解りにくい面をはっきりさせる点で誰でもいいから一度は完成して置くと後から勉強する方々の助けになる」（『新版絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻ix頁 1984年）というものであった。

歴史研究はこれまで文献資料に中心が置かれていた。とはいえ、歴史的基礎的考察においては研究者各自が史資料や図像資料などを活用し、さらに村方の研究などで聞き取りなどを行って史的イメージの構築に努めてきたことはいうまでもない。ただ、その図絵資料の批判的活用方法が確立されていなかったために、正面から取り上げられることが少なかつただけである。歴史教科書や歴史読み物、歴史研究書にも図像が掲げられているが、それらは記述に関係なく挿絵されているのではない。読者に視覚的に訴え、記述内容の理解を助ける、あるいは歴史的イメージを補完するために挿絵されてきたのである。ただし、挿絵についての解説・記述はきわめて簡単で、挿絵そのものの分析も少なかつたといえる。地図や図絵、絵画、写真を積極的に歴史研究の対象資料として読解・活用する動きが出てきた現在でも、

それほどの変化はない。しかし、近年、着実に変化は起きてきている。時代状況の把握や情報発信の装置として地図や図絵、絵画、写真を積極的に歴史像構築の材料として活用する動きが顕著になっている。それはテレビやパソコンなどの影響から、映像や絵画資料などを視覚資料として多用するようになってきた社会現象と踵を一つにする動きと関係しているように思われる。また、来館者の視覚に直接訴え、理解の一助にしようとする各地の歴史博物館の動向などとも、それは関係するかもしれない。

しかし、図絵や絵画などを歴史資料として縦横に活用する手法は満足する程度までにまだ達成されていないのが現状である。それは描かれた図像の事物や行為を厳密に把握し、それを正しく解説することが現在の研究蓄積では非常に困難だからである。とくに、それは民衆生活の事物全般に跨っている。これまでの政治史や制度史の研究の進展に比べて、庶民の生活文化にかかわる研究が少ないことにそれは原因する。庶民が時代時代でどんな道具を使い、何を身につけ、どんな慣行や規律のもとで仕事や生活をしてきたのか、またそれらが地域々々でどのように異なっていたのか、そのときにどんな英知を絞ってどのような工夫をしてきたのかなど、庶民の最も基本的な事柄でさえ判らないことが多々あることである。それは時代が遡れば遡るほど史資料が少なく、当然であろうが、それに比例して不明なことも多くなる。明治・大正の時代でさえも、一部写真などの映像記録があるとはいえ、不明なことが多い。ましてや、江戸時代においてはなおさらである。庶民生活に関わる研究が非常に乏しいことが『絵引』の試作をしてみて痛感・実感させられた。

戦後の1960年以降、歴史学研究において民衆史研究が隆盛したこともあったが、これらの基本的な

事柄の研究がなされないまま、あるいはこれらの研究の深化のないまま歴史研究が行われてきたことにそれは原因があると思われる。神奈川大学が21世紀COEプログラムの一つの柱に据えた『日本近世生活絵引』編纂の試みは、大言壮語的にいえば、こうした状況の克服の意味も含まれている。

本書は中世の絵巻物による絵引、『絵巻物による日本常民生活絵引』を基点とした『日本近世生活絵引』の北海道編、東海道編につづく北陸編である。18世紀の加賀藩城下金沢とその近郊農村に生活する人びとを描いた土屋又三郎の『農業図絵』を題材にした『絵引』である。この近郊農村とは御供田村までのことだが、現在は金沢市内に埋没してしまった地域である。ただ、御供田村の鎮守社が形を変えながら今も残っており、かろうじて昔の縁を偲べば偲べる地域として残っているにすぎない。

本書では『農業図絵』を題材にしながらも農村の様子をあまり絵引にしなかった。というのも、百姓たちの服装など調べてもなかなか解らないことが多かったことによる。『絵引』化に挑戦しても、基礎となる研究・文献が乏しいということにあった。過去、これまで経済史などをふくめた歴史学、とくに農業史では目覚ましい研究があり、その成果が農業発達史調査会編『日本農業発達史』10巻、別巻上下巻（中央公論社刊 1953）などとして刊行された。しかし、当時の明治以来の日本の農業生産力問題とその発展如何への関心との関係から、その内容は農家経営、行商人などによって持ち込まれた農具などの研究に関心が注がれ、農民たちの衣食住を含めた生活実態の解明・追求には及ばなかった。農業発達史調査会に結集した研究者たちにとっても、それらのことは関心外であったに違いない。農民たちの衣食住の研究についてはその後、民俗学などからの追求があったが、十分とはいえなかった。

かかる状況のなかで『絵引』化をすることは相当の専門家集団を編成し、研究会を開き、時間を掛けてじっくり取り組まなければ達成できないことは明らかであった。しかし、その余裕はなかった。海外とのあり方を比較しつつ、後継組織などでじっくり取り組むべき課題である。

『日本近世生活絵引』の作成作業中、取り組むべき課題が多く見つかったが、とにかくスタッフが時間の制約のなか、現在もっている力量を發揮して取り組んだ成果がこの『日本近世生活絵引』北陸編の試案本である。『農業図絵』の著者、土屋又三郎は絵師ではなく、十村役として農業体験をもち、むしろ農業の改良を百姓に指導する立場にあった人物である。土屋については解題でも紹介した。詳しいことはそこを参照していただきたいが、とにかく土屋はその点では農村、百姓を熟知した人物で、『農業図絵』は百姓の生活や年中行事、農事内容も良く知ったうえで書かれた得がたい好資料といえる。本書、北陸編はそれを試案本の形にまとめたものである。

それだけではない。『日本近世生活絵引』北陸編（試案本）としたのは、成果をまとめるにあたって数々の間違いがあるのではないかと危惧したことにもよる。また、多方面からのご批判、ご叱正を受け止めてより一層の正確さを将来に期すためでもある。絵引としての事項キャプションには重複もあり、事項事態も必ずしも多くはない。しかし、『日本近世生活絵引』として、できるだけ庶民の生活を取り上げるように試みたつもりである。

編纂作業は共同研究を基礎に『日本近世生活絵引』北陸編担当者が行った。